

# 青春と戦争

田中成雄

中野一丁目

日中戦争の始まった昭和十二年に十四歳、日本が敗戦した昭和二〇年に二二歳であった私は、戦前、戦中、戦後を青春とともに生きた。

十人兄弟の六番目として生まれた私は、薄給官吏であった父の「学校は手に職のつく学科を選べ」との方針のもとに、東京の府立商工学校電気科に学んだが、三年制のこの学校を卒業すると同時に昭和十三年の十五歳から社会人となった。そして、昭和十四年から十七年まで官庁に勤めながら夜間の専門学校に通った。その後、昭和十九年六月に東京麻布の第三連隊に召集兵として入隊した。

昭和二〇年四月から八月まで、房総九十九里浜の本土防衛軍の師団通信兵として陣地構築に従っていたので、私の戦争体験は、戦場での悲惨なものではない。しかし、戦前、戦中、戦後の青春時代をほとんど首都東京で過ごした私の体験を、次代の人に伝えるのもあながち無意味なことではなからう。

昭和十三年二月六日「早朝、戸山が原の散歩で、中国との戦

争、灯火管制下の夜の勉強、教練、週番と主任技術者検定の受験勉強、共産党のことなどが何故か頭をよぎり、大声をあげたくなった」と書いてある。これは、軍国主義の世相が、当時少年の私の心に、重くのしかかってきたからだと思う。この頃、「国体の淵源と我が国の特色」という題で作文も書かされている。

昭和十三年四月には、国家総動員法が公布され、私は次のような歌をよんでいる。

大君にいのちささけて今を立つ

すめらみくにの猛きつはもの

学舎をいてゆくのちも共々に

たすけあひつつ国につくさむ

このような教育を受けて過ごした中学生生活ではあったが、陸海軍の観兵式や、戦車、軍艦、航空機の行進に感激し、童謡とあわせて明治以来の数々の軍歌を覚えた少年時代であった。

今でも思い出すのは、夜の繁華街（新宿）を歩いているとき、

警官と憲兵が抜刀して喧嘩しているのを目撃したときの恐怖感である。

また、妹と一緒に連れ立って交番の前を通ったときには、警官に「この非常時に男女が一緒に歩くとは何だ」ととがめられ、その後はわざと離れて歩いたりもした。夜の勉強のときには、暗幕のすきまから光が外にもれて、在郷軍人や町会の人に叱られ、灯火管制が厳しいため、製図の宿題ができずに悩んだ。

軍隊生活での私は、麻布の第三連隊に属し、その生活は昭和十九年六月から昭和二〇年九月に及んだ。夜、木製の寝台で寝るときには、中国の戦地から、古年兵が衣服につけて持ち帰った南京虫が兵営内にはびこって、なかなか寝つかれなかった。また、私の所属した隊は食糧が不足し、高粱こうりやんの混じった赤いご飯も給食された。それでも量が足りないため、訓練の激しい初年兵は栄養失調となってやせ細った。

食事当番になった初年兵の私は、下士官や上等兵の食器に、ご飯やおかずを、見た目にも多く盛らないと殴られるので、気をつかった。しかし、その結果、それだけ初年兵の分が少なくなってしまう。そのため、私たちは食後、戸外の食器洗い場で、下士官や上等兵の残飯を奪い合うようにして手づかみで食べた。

昭和二〇年三月の大空襲では、下町の方の空が真っ赤に燃える様子を営庭から眺めて、家族の安否が気にかかったが、外出

が許されないのでどうしようもなかった。

昭和二〇年六月には、米軍の上陸に備えて、房総九十九里浜沿岸の本土防衛軍に編成されたが、毎日のように丘陵の横からトンネルを掘って師団通信隊の陣地をこしらえた。自分たち兵隊が掘ってモッコにいられた土を、農家のオバさんや娘さんが担いで、トンネルの外に運んだ。しかし、陣地が完成する前に八月十五日となり、戦争が終わってしまった。

終戦後、夜の街に灯火管制がなくなった時は、一瞬敗けたことを忘れるほど解放感に浸った。また、その反面、皇居前広場で多くの軍人が割腹自殺したのを新聞で知り、悲愴感とともにこれからのことが不安になった。占領軍司令部によって、昔からの社会体制が次々と崩壊し、何をしたらよいか分からないほど虚脱した。

私の父は当時六〇歳であったが、次のような漢詩で心境を表している。

無欵金甌國 ムケツキンオウノクニ 一朝為粉塵 イツチヨウニシテフシントナル  
祖靈終不佑 ソレイツイニラスケズ 號泣愴何神 ゴウキユウナンゾカミニウツクテエン

(少しのきずもない黄金のかめ、すなわち一度も外国の侵略を受けたことのない国が一辺に粉々のちりとなった。)

先祖のみたまは、ついに助けてくれなかった。泣きわめくだ

けだ。一体何を神に訴えればよいのだろうか。)

焦土未収戦後塵

既多媚虜恸蠻民

忠魂百萬歸何處

靖國社頭秋色深

(焼けのが原になった国土は、戦後のちりがいまだに片づかない。早くもこびへつらう、とりこの心で顔をしかめるようなことをする人が多い。)

忠義のために死んだ百万人もの霊は、どこに帰るんだろう。

靖国神社の社頭は、秋の色が深い。)

その後、復員した兄と私は、父母に代わり、リュックを背負って神奈川、埼玉、千葉など近県の農家を訪ね、衣類を提供しながらサツマイモやジャガイモを買いに行った。また、藪の道で蛇を見つけたときには、持ち帰って日干しにして火鉢でやいて食べたが、なかなかうまくいった。たんぼの中のエビガニも採って食べたが、泥臭いため二、三日で食べられなくなった。

昭和二二年頃には、新宿、新橋、池袋など、駅の周辺にバラック建ての闇市が出来て、占領軍の物や隠匿されていた物資が売られるようになった。霞が関の官庁の勤め帰りに、空腹の私は、新橋の闇市で売っていた、占領軍の残飯を大鍋に入れてシチュウにしたものを、井一杯二百円位(現価換算)で買って食べた。当時はひもじさから何でも食べられた。なかには食べ物

の中から折れた箸やフォークが出てきたこともあった。

街には、戦争や戦災で親とはぐれた孤児が駅の周辺や繁華街にたむろし、なかには占領軍の靴みがきをして、シューシャンボーイと言われた子もいた。浮浪児や浮浪者が、車庫に入った終電の車内で夜を過ごしたりしたので、たちまち、シラミが我々通勤者に移ってその駆除に苦労した。

街を歩くと、棒の先に針をつけたもので煙草の吸殻を拾う人がいた。集めたものをほぐして別の紙に巻いたりして売るのだということを知った。

復員した後の私は、昭和二二年から三年間、またも官庁勤めと学生の二重生活を送り、経済白書で「もはや戦後は終わった」と書かれた昭和三〇年の前年の十二月に結婚した。したがって私の真の青春は、昭和二五年四月から二九年までの四年間(二十七歳〜三〇歳)だと思っている。そして、戦後の社会は混沌としており、生計が苦しかった。

天皇の官吏から国民の公僕(公務員)となった私は、激変の新生国家の業務に、それなりの生きがいを意識して働いたが、折からの労働組合の活動に振り回されつつ、見すばらしい洋服や靴姿で通勤していた。